

第3章

病の前の舅の姿を求めて

鳥山 純子

要約

本稿では、私の記憶にある舅の姿をできるだけ忠実に描写することを試みる。それは学術論文の体はなさないが、今後、舅とその家族との介護を通じた関係の変遷を、舅という人物の物語に位置づけ考察するためには欠かせないプロセスである。本文では、舅の姿を、1) 私にとっての舅の印象、2) 私にとっての舅、3) 舅のライフコース、4) 子どもたちにとっての舅、5) 寝たきりになるまでの舅の闘病、という要素に分けて記述した。

キーワード : エジプト、舅、父親、闘病

はじめに

これから私は1年をかけて、舅が寝たきりになった後の家族の関係に焦点を当てて学術論文を執筆する予定である。その議論のもととして扱うデータは、寝たきりという体の不自由な状態に置かれた舅とその介護をめぐる家族の関わりや日々の実践になるだろう。しかし舅を「寝たきりの男性」として描くことには大きな躊躇を感じている。そこで本稿では、私の記憶にある舅の姿をできるだけ記述することを試みたい。その記述はおそらく学術論文としての体をなすことはなく、その意義も不明瞭なものとなるかもしれない。それでも私にとっては、舅とその家族の体験を、舅という人物の物語の中に位置づけることなく、家族の闘病経験を分析することはできないように感じているのである。

I 私にとっての舅の印象

正直なところ、私は自分の舅のことをそれほどよくは知らない。実際には1998年の年末、書類の上では1999年の年明け、さらに登録月でいえば1999年8月、私はピラミッド近郊出身のエジプト人男性と結婚した。当時私は大学院入学準備の一環としてアラビア語を習得しようとエジプト滞在を始めたばかりで、アラビア語エジプト方言の会話

はほとんどできなかった。出会ってすぐに結婚を決めた夫との日常会話は英語だったし、夫の兄弟姉妹は、英語どころかスペイン語、ロシア語が堪能で会話に不自由はなかった。それに対してアラビア語エジプト方言しかできない夫の両親とは、簡単な意思の疎通を図るのも困難だった。

加えて、舅は寡黙な男性だった。ダブルシフトでホテルのシェフとして働く舅が、家にいる時間はほとんどなかった。夫の両親と同じ空間で過ごしていたにもかかわらず、私には、週末に家にいる舅の姿を見た記憶があまりない。一般には祝日とされる金曜であっても、舅は普段の洋装（といってもシャツとズボンに靴）で金曜礼拝に参加し、礼拝が終わるとそのまま仕事に就いていたように覚えている。時々、私が夜更かしをしてテレビをみていたり、日本人の友人からもらったファミコンで夜を通して遊んでいると、深夜に帰ってくる舅と顔を合わせることがあった。その時にあいさつを交わすぐらいが私たちのせいぜいのコミュニケーションだった。それは相手が私だったから、というだけでもないようだった。姑や夫の兄弟姉妹の楽し気な会話にも、反応を求められれば時々ニコリと笑顔を返したり、ぼそっと単語を口にするぐらいの反応しかしなかった。たとえば彼が何かを一所懸命に説明したり、あるいは誰かに反論する姿は目にしたことがない。また、誰かが話をしているところに積極的に身を置こうとする様子もなかった。深夜に帰宅を果たした後は、一人でトイレに行き、シャワーを済ませ、帰宅から15分後にはベッドで寝息を立てているような人だった。

舅のように寡黙な男はエジプト都市部ではめずらしいように思う。エジプト都市部にいればどこであれ、見知らぬ人間と会話をはずませることは当たり前とされている。人と話をするだけでなく、見知らぬ人同士が交わす会話への関心も高い。そして女性以上に男性に、そうした会話への情熱を感じることも多い。それだけに舅の寡黙さは、周囲の人間からは彼の大きな特徴の一つとみなされていた。週末になると、近隣に居住する親戚が舅を訪ねてくるのだが、会話をするのはもっぱら相手ばかりで、そこでも舅はただ、ときどき相槌をうったり笑顔を向けたりするだけだった。むしろ、相手が話をしている間のほとんどの時間は、興味のなさそうなそぶりであさっての方向を向いていたりするのだった。そして彼らが暇を告げた後、「あの男は本当におしゃべりだ」などといっておもむろにトイレにたったりした。

私にとっての舅は、まあいおなかの真下にサスペンダーでつったズボンをはき、年季が入って砂で白っぽくなった黒いビジネスシューズを履いた、全体的に白い人だった。身長は175センチを超えていたと思うのだけれど、大きなボールをシャツの下に入れたようなおなかの巨大なまるいふくらみが多分に特徴的で、元気なころには長身だという印象を受けなかった。白かったのは、サザエさんに出てくる波平さんのように耳の後ろにしか残っていない髪の毛と、肌の色も同様だった。後に、舅の祖父は舅以上に、さらには「ヨーロッパ人以上に」肌が白かったという話もきいたことがある。丸くて白い。

当時は、舅を見るたび、『アリスの不思議な国』の本に出てきたハンプティダンプティの挿絵を思い出した。

II 私にとっての舅

直接会話を交わすわけではないけれど、それでも舅が私をかわいがってくれていることはなんとかなしに伝わってきた。結婚当初、エジプトでの家庭内政治のいろはもわからない私は、気が付けば家族から疎外され、身に覚えのない非難に晒されることもあった。大学院から子どもを連れて帰ると夫以外の家族に無視される。そういう出来事は大抵前触れなく事故のようにやってきた。自分とは関係のないこと、どうにもできないことだと思いつつも、家族から敵意をむけられるのはつらかった。

そんな時でも舅は、帰宅時には変わらず、何事もなかったように私に挨拶をして、お茶を入れればお礼を言ってくれた。それは単にいつもと同じルーティンではあったのだけれど、その変わらぬ態度にはずいぶんと救われた。後に、突然やってきた日本人妻である私を、一番最初に褒めてくれたのは舅だと知った。舅は、寡黙であるのに加えて他人を褒めることがほとんどなかった。それだけに、他の家族からの私に対する評価は、それによってずいぶん変わったのだと聞いたことがある。逆に、結婚すると聞きあわてて日本からやってきた私の両親も、舅の人となりを見てずいぶん安心したらしい。舅がみせた物静かで落ち着いた様子と、人の話を聞く姿がとても好ましく映ったようだった。

舅の理路整然とした思考に驚かされたこともあった。夫の家族の親族図を書いてみようと思いついた私は、まずは自分がともに暮らす家族と、婚出した娘の家族とその子どもたちを図に書き入れた。それを見た夫は、上の世代の家族について知る人物として、本家筋の仲のいいおじさんと呼び、彼に情報を得ながら親族図を発展させるというアイデアを思い付いた。しかし、実際におじさんに話を聞き始めると、誰と誰がどういう関係にあるのかは語られる一方、親族の全体像が見えてこない。そもそも知らない固有名詞ばかりの会話の中で、その人物一人ひとりが親族図のどこに位置するのかを把握する作業は困難を極めた。話される内容は特定の人物の思い出話が中心で、その人物を中心に幾人かの関係が語られた後は、話しの流れで思い出した別の人物に中心が移ってしまう。それがどこのだれかと聞いても、その返答は的を射ない。私は、なんとなくの感覚で書き入れた人物が、全く別のつながりに位置する人物だったり、親族ではない人物だったりすることに混乱し、不満と疲労でくたくたになった。最初に用意した模造紙の親族図は、名前を書き入れるほどにぐちゃぐちゃになった。

ところが、本家のおじさんが立ち去ると、横で会話をずっと聞いていた舅が、私の親族図の間違いを指摘し始めた。そして舅はその人物が図の上で位置すべき適切な場所を特定することができた。舅は、ある人物の両親、結婚相手、そしてその人物の子どもたちを生まれた順番にそらんじることができた。その人物に子どもが何人いるのか、上か

ら順番になんという名前なのか。私が知りたい情報を、私が知りたいようにシステムティックに整理し、私にとってわかりやすいように話すことができたのだ。そして最後に、「彼は本家の家で育ったから、さすがにいろんなことを知っているね」と本家のおじさんをほめた。舅は文盲だったが、シェフとして海外から派遣される外国人に信頼されているという話を聞いていた。この出来事での舅の態度から、おそらく意思疎通がうまくいかなかったであろうエジプトのホテルで、外国人シェフが舅の情報の整理能力ともの静かな態度に信頼を寄せたのであろうことは推測ができた。

舅はまた、私に道を説明するのが上手かった。言葉のハンディがあるにもかかわらず、他の人の説明を上手く理解できない私でも、舅に聞けば、なんとか一人でそこまでたどり着くことができた。

III 舅のライフコース

舅は1941年に4人兄弟の長男として生まれた。彼が生まれたピラミッド近郊の村は、サハラ砂漠に接していたことから古くからラクダの取引が行われ、多くの村民がラクダを中心とした精肉業を生業としていた。その後には、多くの村民がカイロ市内外のホテルやレストランでのシェフとして働くようになっていく。私が1999年からシナイ半島で働いていた5つ星ホテルのキッチンにもこの村出身者の男性が数名働いていて、同じ村のよしみで彼らにかわいがってもらったことを覚えている。舅は小学校には3年通ったきりで、母親の命令により学校を離れ、親戚の男性とともに幼いうちからピラミッド近くのホテルのキッチンに出入りするようになった。そこからさまざまな職場を経てシェフとなり、定年前の20年間はカイロ中心部の5つ星ホテルと4つ星ホテルでダブルシフトの勤務を行っていた。舅の兄弟は4人全員がカイロのホテルやサウジアラビアで勤務するシェフとなっている。

22歳の時、母親が連れてきた9歳年下の同じ親族の女性と結婚し、その後5男3女をもうけるが、長男を生後1か月で亡くしている。結婚後3か月までは実家で両親と共に暮らし、その後二人だけの住居に移り、さらにその後数年で村外れに念願の持ち家を手に入れた。当時は村はずれだった家族の住居は、今では拡大した村の中心部に位置している。40代の後半に父親を、50代半ばに母親を亡くしている。以来長男として兄弟全員、とりわけ一番下の弟には半ば父親代わりに接していた。そのため、末の弟を40代で亡くした際には大きなショックを受けたようだった。

第三次中東戦争の際には志願して参戦し、兵站ドライバーとなった。参戦した当時の話をねだったときには、「自分がやっていたことに危ないことは何もなかったよ」、と話しはしたが、当時の生活の様子や政治状況について語ってくれたことはなかった。彼の右腕の内側、肘と手のひらの中間には、その時入れられたという青字のアラビア文字での数字の刺青があった。残念ながら私はそれを記録していない。6桁か8桁の数字であ

ったように思う。当時舅はヤーセル・アラファトに傾倒し、戦争後に生まれた四男にヤーセルと名付けた。

舅は毎朝7時前には出勤し、夜11時すぎに帰宅した。舅がたいてい木曜日と金曜日の午前中に休日を取るので、木曜日の昼食時に1週間で一番豪華な食事をするのが家族の決まりになっていった。家族にとって木曜日の昼食は、日ごろ肉を口にすることがなかった時代でも、なにがしかの肉を食べることができる特別な日として子どもたちが心待ちにする日になった。舅はまた、毎日帰宅時に翌朝子どもたちが朝食に食べたり学校におやつとして持っていくコッペパン(フィーノと呼ばれている)を買って帰ってきた。朝舅が出勤した後に子どもたちが起きて、彼が前日帰宅し、彼らのためにパンを購入してきたことはそれでわかったという。そして時には、会社が宣伝用に配るカレンダーやスケジュール帳を持って帰ってくることもあり、そうしたカレンダーは年間を通じて居間の壁を飾っていた(私が暮らすようになり目にしたのは、保険会社と銀行の名前が入ったものだった)。

定年以前の舅は、会社を休むような大きな病気にかかったことはなかったが、私が出会ったころには糖尿病と高血圧の薬を服用するようになっていた。とはいえ、250ミリリットル程度のガラスのコップでだされる紅茶には、まだスプーン山盛り2杯半の砂糖を入れていた。甘いお菓子が好きで、それが家にあると、ふらっと台所に行ってはちよつとずつつまみ食いをするようなところもあった。

エジプトではサッカーの人气が高く、なかでもアル＝アハリーとザマーレクという二つの有名チームが人気を二分する状況にある。夫の家族は姑を始め、7人の子どもたち全員、さらには孫の世代にいたるまで全員がアル＝アハリーファンだった。ところがなぜだか、舅だけはたった一人でザマーレクファンを自負していた。子どもたちは時に父親がザマーレクファンであることを笑いのタネにしつつ、舅の前で自分たちは母親と同じアル＝アハリーファンだとふざけることがあった。そんな時でも舅は、ニコニコと笑顔を浮かべ、「お前たちにはサッカーがなんたるかがわかっていない」といった短い言葉をふざけて投げかえしたりした。とはいえ、定年を迎える前の舅が子どもたちと一緒にサッカー観戦する姿はほとんど見た記憶がない。

IV 子どもたちにとっての舅

私にとっては寡黙でやさしいという印象しかない舅だったが、夫にとってはまた厳しい父親でもあったらしい。とりわけ礼儀作法には厳しく、たまに家にいた父親にぞんざいな口をきいたり、特に来客のあるときに、列席する大人に礼儀を欠いた態度で接することは決して許されなかったという。確かに、私が共に暮らすようになった後でも、父親が帰宅すれば居間にいるみなが立ち上がり、帰宅した舅に挨拶をした。それは時には冗談のような身振り手振りを加えたものになることもあったが、とにかく舅の帰宅を無

視したり、あるいはきちんと敬意を示さないことは許されないのだった。帰宅した家族に挨拶をしたり、出かける時に一人ひとりに挨拶することになっていたのは何も舅を相手にしているときには限らなかった。舅の家は、エジプト都市部の多くの中産階級や労働者階級の家と同様、外に通じる扉が居間兼食堂の一角をなしていた。そのため、居間兼食堂でくつろいでいる人間の前を歩いて人が外出したり帰宅したりした。居間兼食堂では、調理をしていたり、宿題をしていたり、テレビをみたり、最近では携帯電話を操作したりみなが思い思いのことをしているのだけれど、だれが帰宅しても、そこにいる人間全員とあいさつを交わすことになってなっていた。そしてそれこそが、舅が大事にしていた礼節であつたらしい。

またこの家では、舅の前では喫煙が許されていなかった。成人した男子4人全員が喫煙者だったが、舅の前だけでなく、舅が過ごす可能性のある空間での喫煙は許されていなかった。そのため喫煙はどうしても屋外でしなければならないのだが、思いがけず舅が帰宅したような時は、舅の姿を認め次第、大慌てでタバコを投げ捨て証拠隠滅を図るのだった。目上の人間の前で喫煙をしない、というのはエジプトで広く語られるルールの一つではあるけれど、他の家族に比べても、それが異常なほど徹底されていることは見て取れた。その理由は舅がシェフだったことにも起因していたようだった。彼らの行動について質問した時に、次男から最初にされたのは、舅がシェフだから、味覚に支障がでないように舅の前では喫煙しないという説明だった。ただ不可解なことに、兄弟全員が、父親に自分たちの喫煙行動については嘘をつき、みな喫煙はしていないと父親に言っていた。この嘘は、舅がシェフであることで説明できるはずはない。そしてもちろん舅は、自分の息子たちが隠れて喫煙しているのを知っていた。

厳しく、あまり感情を見せない舅のめずらしいエピソードとして夫が語ってくれたのは、オバケとの遭遇の話である。働いていない時の舅が唯一頻繁に行っていたのは親族の訪問だった。幼い子どもを同伴させてくれることもあり(ただし一回につき一人だけ)、その相手に選ばれることはとても嬉しいことだったという。ただし、親族のうちの一軒は、住宅が隣接して建つ村の中でも、大きな空き地をはさんだはずれにあり、日が暮れた後にその空き地を横切るのは幼い子どもにはこわいことだった。そこで舅は、その親族の家を訪れる時だけは、子どもを肩にのせ、空き地を横切ってくれたのだという。ところがある日、空き地を横切るために子どもを肩に乗せた舅が、空き地の中で急に駆け出した。おどろいて父親の顔を見た幼い夫は、舅の顔にただならぬあせりが浮かんでいるのを目撃したという。しばらく小走りで走った後息子を地面に降ろした舅は、一言、「あれがアフリートだよ(オバケ)」と口にしたらしい。この出来事は、私の夫に、自分の父親が感情を露わにした唯一の出来事として記憶されていた。私にとっては、舅がこうした話が語り継がれるほど、普段は感情を表に出さない穏やかな人物だったことを表すエピソードでもある。

また厳しい父親という評価をそろって口にする息子たちと違って、娘には少し違った父親でもあったらしい。なかでも三女は、父親と同じベッドに寝起きし¹、母親が父親の帰宅を待たずに先に就寝するようになった後には帰宅後の父親にお茶を入れたり、脱いだ衣類を整頓したりする役目を与えられていた。三女は、「自分とはとくに舅にかわいがられた」ことを自負していて、「私たちはなんとなく気質の相性が良いのだ」、と話していた。どうやら、舅は女兒に対しては男児に対するほどに強くしつけの必要性を感じていなかったようで、同じような発言は、後に次女が舅について話をするときにも飛び出した。ただし、舅が自分に都合の悪い話にはほとんど反応を示さなかったことも事実のようで、女兒の態度を細かくとがめなかったからといって、子どもをただ甘やかす父親というわけでもないようだった。

いずれにしろ舅は、子どもたちにとっては頼りになる、強く、ちょっと恐い寡黙な大人の男というイメージを持たれていた。それはたとえば、子どもたちの半数が大学進学を果たした後も語られ続けた父親像だった。

V 舅の闘病、その始まり

舅が最初の脳梗塞に倒れたのは、定年退職から2か月が過ぎた2000年9月の終わりのことだった。その前々週までアレキサンドリアで休暇を楽しみ、その時にも、車三台に家族全員が乗りきれないからと、舅と10代後半の孫の二人で公共交通機関を使ってカイロ―アレキサンドリア間240キロを移動した。それが、休暇が終わり2週間たったある金曜日の早朝、トイレにたとうとしたところ、立ち上がることができずに顛倒した。

その日、私が家族の居間がある一階に降りてきた10時には、すでに一人目の医者と呼ばれて診察を終えた後だった。その医者は、近所の薬局の薬剤師に連絡をしたところ手配してもらえた医者だという話だった。呼ばれた医者は、舅の症状を高血圧の発作だろうと診断し、ビタミンDを投与した後、水分をよくとり、安静にしているよう指示したらしかった。しかし、顔の右半分の表情がゆがみ、右手を動かすことができない舅の症状は、私にはそれで治るものには思えなかった。私はどうしてもその診断を信じることができず、次男の許可をとり日本大使館で配られた医療機関一覧に名前のある医療機関に電話をかけた。電話は運よくつながり、電話をとった医者は、舅の症状は医者の見立て通り高血圧の症状の可能性もあること、しかし脳梗塞の可能性も高く、希望するならばCTスキャンを撮ることができることを教えてくれた。

¹ 当時のエジプトでは、一台のベッドに一人ずつ寝る習慣はなかった。当時この家族には3台のベッドがあり、それを婚出した長女、次女、そしてすでに結婚していた次男と三男を除く5人で使っていた。たいてい一人一枚ずつ上掛けを使う雑魚寝スタイルがとられ、「ベッドを共にする」ことに性的な意味合いは薄い。

1 回目の CT スキャンでは、舅が脳梗塞を起こしているかは特定することができなかった。ただし脳梗塞直後ではそうしたことがありえるとのことで、48 時間後に 2 回目の撮影を行った。結果脳梗塞が判明し、そのまま CT スキャンを撮ったカスル・エル＝アイニ病院に入院した。舅は 2 週間ほど入院し、入院中のリハビリが功を奏したのか、少し右半身を引きずる程度の障害で自宅に戻ることができた（退院後も 2 カ月は毎週リハビリに通っていた）。入院中は完全介護と言われたものの、面会終了時間まで必ず家族の誰かがつきそった。姑は毎日病院で付き添いをした。家族にとっては、先の見えない不安な思いの中で過ごした長い 2 週間だった。

今思えば、このときの脳梗塞は大したものではなかった。舅は退院後には一人で何でもできたし、次男と三男が経営を始めた自宅から 600 メートルほどの距離にあるアホワ（エジプト式のローカルなカフェ）にペットボトルに入れたフレッシュジュースを届けることもできた。午前中は自宅前の路上においたプラスチック製のビーチスチールにこしかけ、日の出の礼拝以外は礼拝は全て自宅近くのモスクで行っていた。2 時ごろに昼食をとり少し昼寝をした後は、夕方から息子が経営するアホワで過ごす。客が多くなる 8 時半から 9 時ごろにアホワを離れ、居間でしばらく孫たちと過ごすか、そのままシャワーを浴びて就寝する日もあった。入院して以降は、姑が舅の食事を厳しく管理するようになったが、他の家族用に羊肉の煮込みが用意される日には、羊肉をよけてよそった煮込み野菜ソースに、玉ねぎのスープで煮込んだ鳥の胸肉を添える、というような代替メニューが出されていた。おそらく、一番厳しく管理されていたのが甘い食べ物とパン（現地ではアエーシと呼ばれるイーストを入れてふくらませないパン[以下アエーシと記す]。日本で売られているピタパンに近い。）を食べないようにすることだった。アエーシには種類があり、舅には製粉された小麦粉の割合が少ないアエーシが特別に出されていた。舅は、白いアエーシの方がおいしいと不平をいいながら、毎朝自分で、家族のための白いアエーシと自分が食べる茶色いアエーシを近くのアエーシ工房に買いに行っていた。

このころの舅は、孫の手を引きながら親族の家に行くこともできた。遠出でなければ、公共交通機関を使って移動することもできた。また朝早くに起床するので、孫のスクールバスの管理もできた。スクールバスは、自宅前に通りかかったときに待機していないと走りすぎてしまうので、必ず呼び止めてくれる舅の存在は頼もしかった。近所の学校に行き始めた孫の送り迎えも舅の役割だった。舅は毎朝 5 歳の孫の手を引いて学校まで連れて行き、学校が終わる時間になると学校まで迎えに行った。また、子どものための予防接種巡回を知らせてくれるのも舅だった。クーラーボックスにワクチンを入れ、近所の住人名簿を手を巡回してくる保健師は、私などには自宅付近をいったいいつ巡回してくるのか見当もつかなかった。しかし舅は、通りすがりの知り合いに声をかけ、彼らがどこで保健師を目撃したかの聞き込みを続け、かなり正確に保健師が自宅前にたどり

着く時間を言い当てることができた。その点で、右半身に軽度の麻痺が出てなお、舅は私にとって心強い子育ての味方だった。

同様に、舅は家族の出入りをいつ何時もかなり正確に把握していて、当時大人 9 人、子ども 4 人が暮らす建物に、誰が残っていて誰が外出しているのかを常に言い当てることができた。それは、舅が上述のようにシステマティックに物事を管理する性格であったのと同時に、外出するときには、玄関口に座る舅に必ず挨拶し、行先を告げなければならなかったからのことだったと思う。舅に知られずに家の扉を通過することなどほとんど不可能だったのである。

当時の舅は家の外で起こったニュースを中の人間に伝える役割も果たしていた。この村では、人が亡くなったことを知る最も重要な方法が、モスクが運営する街宣車でのアナウンスだった。外に座っている時間が最も長い舅は、大抵が街宣車の第一目撃者であったし、足りない情報は通りを歩く知り合いを呼び止めて収集することができた。また結婚式の招待状を受け取るのも、そして時々私あてに届く国際郵便を受け取るのも舅の役目になっていた。その意味で、舅は、同じ通りに暮らす人々や親族にとって、文字通り家族の「顔」となっていた。それでもやはり、もともと物静かで自己表現が控えめなためか、家の中で家族のイベントが行われる時でも、積極的に人の中に入って行くことはなかった。参加しても出入り口のすぐ近くから遠巻きに眺めているか、あるいは出入口の外で待っているようなことも多かった。末の娘の婚約式やヘナの夜といったビッグイベントでも、息子たちがおどけて、招待された女性客を盛り上げているその外で、舅はあたかも門番のように静かに招待客の出迎えに終始していた。

VI 舅の闘病、その後

舅が二回目の脳梗塞に倒れた 2006 年、私と夫は日本にいた。そのため事の詳細はつかめていない。聞いたところによると、気候が温かくなり始めた 3 月、やはり前回同様、朝の起き掛けに倒れ、病院にかつぎこんだところ、脳梗塞と診断されたらしい。ただし諸事情により、その時は前回かかった都心の病院ではなく、家の近くの総合病院（ザハラア・アル＝アハラーム・ホスピタル）を利用した。そこではリハビリ治療は行われず、舅の体には左半身に麻痺が残った。左半身の麻痺は前回の右半身麻痺以上に深刻で、以後痛覚も戻らなかった。左足が上手く動かず歩行時にバランスを崩しやすくなり、転倒を恐れた家族は舅にコの字型の歩行器の使用を勧めた。歩行器を使えば自分の意志で体を動かすことはできたが、長い歩行は困難になり、玄関から 60m ほど離れたモスクにも行くことはなくなった。舅は一日の長い時間は玄関口の外においたビーチスツールに座って過ごしたが、以前のように自分でスツールの出し入れをすることはできなくなった。

それでも、2007 年 9 月には、くじに当たったハッジ（ハッジ月に行うメッカ巡礼）に

出た。車いすでの巡礼は予想以上に快適で、付き添いとして扱われた姑と三男も障がい者や病人専用のファスト・ルートを利用でき、その時ばかりは姑も舅が車いす利用者になったことを喜んだ。

左足が自由に動かせることができなくなったことで生じた困難の一つが、エジプトにおいて家庭内の履物として利用されているサンダルを上手く履きこなすことができなくなったことだった。家族がそのことを気にしている様子はなかったが、舅の足の状態は、私には周囲からの心無い仕打ちに思えて気になった。サンダルなしのむき出しの状態では引きずられる舅の左足は石のように固くなり、皮膚も分厚くなっていった。かかとはつねにあかぎれのような状態だったが、痛覚がないためか、そのことについて舅本人は特に不満をもらしてはいなかった。家族は冬には厚手の靴下を履かせていた。ただはきぐちの締め付けがきついと血行が阻害され、糖尿病を患う舅には重大な疾患が予想されること、また常に引きずって歩くためすぐに穴があくことなどから、いつも薄汚れてぶかぶかの布を履いているように見えた。私にはそれが家族の思いやりのなさを象徴しているように見え、見るたびに悲しくなった。すでに1回目の脳梗塞以降、舅がガラベイヤと呼ばれるエジプトで一般的に着用される長いシャツのような長衣以外の衣類を着用することはなくなっていた。舅はいつでも夏には夏もののガラベイヤを、冬には冬用のガラベイヤを着用した。二回目の脳梗塞以降は下着（パンツ）の着用もなくなり、着用する衣類はガラベイヤだけになった。

とはいえ、このころはまだ不自由を伴いながらも言葉での意思疎通が可能で、食事も居間に座って自分でスプーンを運ぶことができた。ただし、2回目の脳梗塞以降、姑による食事管理の厳しさは増し、それまでの量を制限した通常食の代わりに、塩気を抑えた野菜スープと鶏の胸肉や、トマト味の野菜の煮込みにアエーシを浸したもの、夕食には、ヨーグルトにアエーシを浸したものが出されていた。これらの料理は姑が舅のためだけに他の家族のための料理とは別に調理をしていた。ただし、料理の見た目は非常に悪く、出された料理に舅があからさまな不満を示すこともあった。そういう舅の態度を姑はきつくとがめ、自分のことを考えられない人間を世話することほど疲れることはない、という発言を舅の前ですることも多くなった。とはいえ、姑は舅の食事やお茶を毎日決まった時間に出し、外出する都合で姑自身がそれを行えない時には嫁や息子たちに代わりにそれらを行うよう、事細かく指示を出していた。

このころ、舅は少し怒りっぽい様子を見せるようになり、孫たちが自分の周りで騒がしく遊び始めたときなどは、杖を振り回して自分の居室に戻るよういつけることが増えた。基本的に子どもが騒ぐ様子が好きそうではなく、近くに子どもを呼びよせることはなかったが、その中でもどうしたわけか私の次女とは気が合うようで、よく自分の近くに座わらせていた。子どもたちにとっては、左半身が麻痺していて、ときどき左の口元からよだれが垂れている祖父の姿にはある種の怖さも付きまどっていたようだった。

また、舅に呼ばれた子どもたちは必ず舅の頬にキスをしなければならなかったが、終わってからそれを嫌がるそぶりや冗談にする子どもたちもいた。舅と馬があうように見えた私の次女は、そういう意味では模範的な態度をとる子どもではなかった。彼女は舅のよだれをしばしば笑いの種にしたし、自由の利かない姿を誇張して舅の真似することもあった。それでも彼女のそうした姿が舅の気に障ることはないようだった。そんなある日、私の次女がふざけて舅に、自分より小さな男の子にするように、舅のことを名前で呼んだ。家族内であっても、目下の人間は目上の人間を敬称で呼ぶことが一般的で、目上の人物のファーストネームを呼ぶことは通常は考えられないことだった。それを彼女は二世代上の尊敬すべき祖父に対して行ったのである。その発言に、その場に同席していた私は緊張し、怒りっぽくなった舅が私の次女を一喝するのではないかと身構えた。ところが舅は、はらはらとまだ自由が利いた右目から涙を流し、彼女を近くに呼び寄せ何かを言った。彼女もまた驚いている様子ではあったが、わかった、というそぶりを見せた後で、おどけた様子で、「ヤワーディ ヤ 〇〇〇 (かわいい〇〇〇くん)」と舅のことを身振りをつけて名前で呼んだ。すると舅は、今度は声を挙げて「オンミ (お母さん)」と泣き出したのである。

これは、普段感情をあらわにすることのなかった舅を知っていた私には強烈な印象を残した出来事だった。しかし私の次女はといえば、その後すぐ従妹たちとの遊びに戻り、舅も数十秒後には何事もなかったような状態に戻っていた。

VII 寝たきりの舅と変化する関係性

舅が三回目の脳梗塞に倒れたのは 2009 年冬のことだった。それまで不自由だった左半身以上に、今度は右半身が麻痺をした。それまで半身麻痺を抱えながらも毎日ガラベイヤを着がえ、腕時計をはめていた舅は、それ以降上半身 T シャツ、下半身にはシーツを巻かれた状態で車いすに座って生活するようになった。そして翌年の冬、自由の利かない体でトイレまで自分で行こうとした際ベッドから転落し、大腿骨を骨折して寝たきりになった。

おわりに

寝たきりになった舅は、その二年後に亡くなった。舅が倒れたのは 2011 年初頭の「1 月 25 日革命」直前の出来事だった。そして舅は、大統領が変わり、将来の見えないエジプトの混乱の中に亡くなった。葬儀には多くの人が集まり、舅とその息子たちの社会的威信や社会的成功が確認されたという。ただし、私がこの先 1 年かけて論文にしようと試みるのは、寝たきりになった後の舅の姿と彼をとりまく家族の関係である。このことが私の心の中に小さくないわだかまりを生んでいた。

最後を寝たきりで終えた舅も、当然のように初めから寝たきりだったわけではない。

寝たきりになった舅の話語る上では、舅が元気だった姿も忘れないでおく必要があるだろう。体の自由を奪われる前の状態と、寝たきりになった後の状態は、介護する人間にとってもされた人間にとっても重要な意味をもつはずである。それが時に介護のインセンティブとなったり、同じことを耐え難いものにもする。また舅の場合は、介護が必要な状態にも様々な段階があった。家族による介護は、寝たきりになってから始まったわけではないのだ。舅の場合は、骨折に先立つ10年間、舅も家族も困惑と混乱の連続を経験した。その境遇のただなかにある舅と家族にとっては、どの段階においても、舅の体の衰えは忌むべきものであり、一刻も早く回復されるべきものであった。そのため直視が難しく、状況はつねに最悪のものとして認識されていた。あとから考えればたいした困難ではなかったとしても、次々生まれる新たな問題に対処する私たちは必死だったのだ。そして私たち家族はいつも元気な時の舅の姿と比べては、病に倒れた後の舅の状況を嘆いてばかりいたのだった。

本稿で提示した舅の姿が、この先展開する議論においてどれだけの重要性を持つのかはまだ未知数である。それでもなお、私はどうしても本稿で私が見た倒れる前の舅の姿を描きたかった。もし舅が生きていたのなら、本稿で提示した舅の姿こそ、彼が世間に覚えていてもらいたいものだったのではないかと思えるからである。私の拙い筆で、どこまでその姿を再現できたのかはわからない。本稿が少しでも、舅の在りし日の人となりを表す記述になっていることを願いつつ、結びとしたい。

<参考文献>

ルイス・キャロル著、河合 祥一郎訳 2010. 『不思議の国のアリス』角川書店。